日本銀行の支店建物 5

日本銀行旧松江支店

中村茂樹　日本銀行文書局技師

古くから城下町として栄えた松江市は、中国・四国地方で日本銀行の支店が広島に次いで開設された山陰の中心都市です。また、堀川が縦横に走る宍道湖畔の風光明媚な水都として、小泉八雲により世界に紹介され、京都、奈良に次いで国際観光文化都市（注1）に指定されました。第五回は、そんな松江市に残る旧松江支店の建物を紹介します。

松江支店の開設

今から約四〇〇年前の江戸初期に、出雲の国のほぼ中央にある宍道湖畔に城下町が形成されました。城下町・松江の始まりです。

一八万六千石の松江松平藩の城下町として栄えた松江の象徴は、宍道湖を見下ろす亀田山に築城した松江城の天守閣（注2）と、その周りに堀川を縦横に掘削し、その土砂で入江や沼地を埋め立てて作られた武家屋敷の街並みでした。明治二十二年（一八八九）に市政が施行された時、人口三万五千人の山陰最大の都市となっていました。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）（注3）が松江中学校で教鞭をとりながら、武家屋敷跡に居を構えたのもこの時期です。

一方、山陰地方は大阪の経済圏にありましたが、交通機関の整備が遅れていたこともあって、当時の松江・大阪間の送金に少なくとも三日は要すると言われるほど、金融面では不便を強いられていました。

明治四十一年（一九〇八）十一月にようやく鉄道（山陰線）が松江まで開通したものの、冬季はしばしば交通途絶を免れませんでした。

こんな中、地元からの強い要望を背景に、日本銀行は大正七年（一九一八）三月、地元銀行の利便性向上と銀行券流通の順便化を図るため、松江支店を開設することになります。中国・四国地方では広島に次ぐ支店開設でした。

明治期に開設された支店がいずれも全国有数の商工業の中心地であったのに対し、大正期の支店開設は、松江支店のほかに、新潟、松本、秋田、熊本および岡山と、むしろ米穀等農村金融の中心地に広がったといえます。

支店開設のため、対岸に京店（注4）の繁華街が広がる殿町の堀沿いに用地を取得しました。（図1）

この周辺は、明治から大正期にかけて山陰の金融の中心地として第三国立銀行松江支店（注5）を始め、八束貯蓄銀行（注6）本店等の地元銀行が立ち並び、「松江のウォール街」と呼ばれるほどでした。

上・現在の外観、下・新築時の外観

（注1）国際観光文化都市
日本において、国際的な観光・温泉等の文化・親善を促進する地域として特別法により指定された都市で、現在松江のほか、京都、奈良、軽井沢など一二都市が指定されている。

（注2）松江城の天守閣
山陰地方で唯一現存する天守閣。外観五層の望楼を誇り、現存する十二の天守閣の中では二番目の平面規模を誇る。国の重要文化財。別名・千鳥城。

（注3）ラフカディオ・ハーン
明治二十三年（一八九〇）に来日以後、終生日本の英語教育の最先端で尽力し、欧米に日本文化を紹介する著書を多く残した。最初に松江に赴任し、同地で小泉セツと結婚したことから、明治二十九年（一八九六）に帰化した後は、「小泉八雲」と名乗った。なお、八雲は出雲国にかかる枕詞「八雲立つ」にちなんだもの。

図1　松江支店の所在地

初代の松江支店建物

初代の松江支店は当初、大正六年（一九一七）十二月に完成する予定でした。しかし、夏場からの雨天続きの天候による現場作業の休止や、交通機関の一時不通が重なり、屋根葺き材が到着しないなどの悪条件が続いて、三カ月の工期延長を余儀なくされ、翌七年（一九一八）三月にようやく完成しました。

初代の松江支店は、木造平屋建て（一部二階建て）の本館と、レンガ造り二階建ての金庫および木造平屋建て（一部二階建て）の食堂・宿直室等の付属家で構成されていました。（図2）

本館は外壁に化粧レンガを貼ったレンガ造り風洋風建築でした。（写真1・2）

設計は日本銀行技手の平松浅一が携わりました。明治期の日本銀行本支店の設計に携わった辰野金吾と長野宇平治は、一連の建築が一段落したあと、ともに日本銀行を辞し、大正期の支店の設計は二人に育てられ銀行に残った技師陣に引き継がれていました。正当な古典様式のデザインは、まさに二人に厳しく育てられた証しでした。

しかし、初代の松江支店建物は予想以上に短い運命を強いられることになります。宍道湖畔の沼土で形成された軟弱な地盤に対する基礎工事の不備もあり、開設後半年にして一番重い金庫が沈み始めたのです。

図2　初代松江支店の平面図

初の現地改築による二代目の松江支店

初代松江支店の金庫は、開設から一七年後の昭和十年（一九三五）時点で当初から平均約三〇センチの沈下を示し、地質調査の結果により、補強工事はほとんど不可能との結論に達しました。加えて本館および付属家とも職員増加のため著しく手狭となったので、本館・付属家および金庫の全部を鉄筋コンクリート造りに改築することになりました。

日本銀行で初めての現地改築です。新築移転と異なり、現地改築ではすべての業務が敷地内で継続される必要があり、殊に金庫と営業場の業務継続は絶対条件となります。

写真1　初代松江支店の外観

写真2　初代松江支店の営業場

（注4）京店
江戸時代、京の都から輿入れした城主の奥方のために、京都に似せたまちづくりをした由来から京店と呼ばれた。

（注5）第三国立銀行松江支店
日本銀行松江支店が開設されるまで、島根・鳥取両県の国庫金の出納保管事務を取り扱っていた。明治三十五年（一九〇二）に土蔵造りとして建てられた建物は現存（現かげやま呉服店）。第三国立銀行は、明治九年（一八七六）開設で後の安田銀行（現みずほ銀行の源流）の前身。

（注6）八束貯蓄銀行
明治四十五年（一九一二）に設立。大正十一年（一九二二）に八束銀行となり、昭和二年（一九二七）に松江銀行と合併。現在の山陰合同銀行の源流。大正十五年（一九二六）に建築された山陰合同銀行旧北支店（旧八束銀行本店）の建物は平成二十四年（二〇一二）に、「ごうぎんカラコロ美術館」として生まれ変わった。

現地改築の施工手順として、①まず、本館および付属家の建て替えに支障のないスペースに仮本館を建築し、本館建て替え中の金庫動線を確保するために付属家を改造（仮付属家）した後、②既存本館を取り壊し、③その跡地に新たな本館（地下金庫含む）を建築し、④不要となった仮本館・仮付属家と既存金庫を取り壊し、⑤新たな付属家を建築し、⑥最後に、境界塀と外構工事を行うこととしました。（図3・4）

こうした複雑な手順を受けて延べ三八カ月間の長工期を予定し、昭和十一年（一九三六）十一月に着工、昭和十四年（一九三九）一月に完成予定としました。

着工にあたっては、敷地内に現場事務所および材料置き場のスペースを確保するため東側の隣接地を購入しました。

さらに、工事中も敷地の拡充を模索し、北側隣接地を購入することができたため、そのスペースに仮金庫を設けました。これにより本館の完成を待たずに既存金庫を取り壊すことが可能となり、大幅な工期短縮が可能となりました。（図5）

当初計画よりも一〇カ月の工期短縮を実現し、昭和十三年（一九三八）三月に二代目松江支店が完成しました。

なお、軟弱地盤対策として、厚さ約一メートル四〇センチの基礎底盤（注7）を築き、さらに同基礎下に長さ一三メートルのコンクリート杭を三二七本打ち込みました。

日本銀行最後の古典様式建築

二代目の松江支店は、鉄筋コンクリート造り地上三階、地下一階の本館・付属家で構成されています。金庫は本館の地下に設けられました。（図6）

設計は、長野宇平治（写真3）に委ね

図3　現地改築説明図1

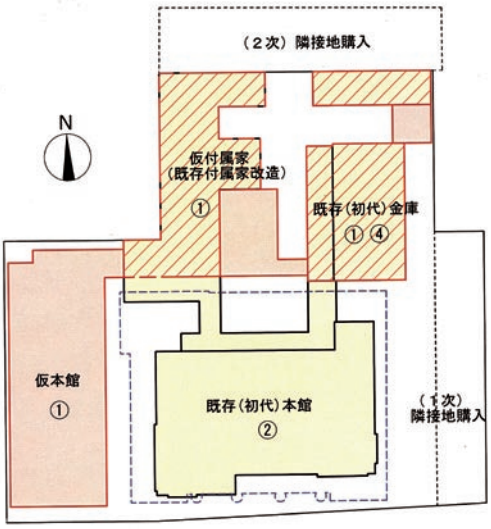

図4　現地改築説明図2

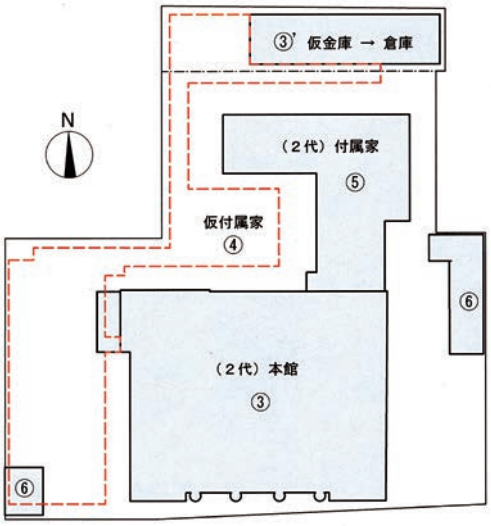

図5　工程表

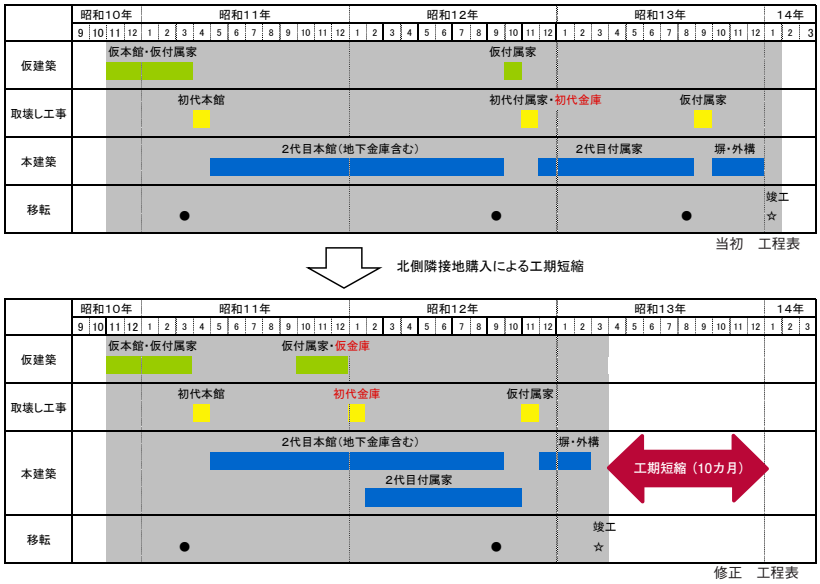

図6　新築時の2代目松江支店の平面図

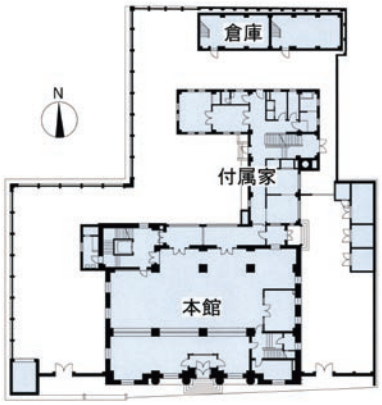

写真3　長野宇平治
明治26年（1893）帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）造家（建築）学科を卒業。日本銀行技師長。わが国屈指の古典主義建築家として知られ、日本銀行本支店をはじめとする数多くの銀行建築を手がけた。
（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

（注7）基礎底盤
鉄筋コンクリート造り建物の基礎構造部の底の部分。

写真４　集中豪雨による冠水

られました。長野は、大正期にいったん日本銀行を辞して自らの建築設計事務所を開設して、銀行建築を中心に数多くの古典様式の建物を設計しましたが、大正十二年（一九二三）の関東大震災を機に本店建物の震災復旧に携わり、昭和二年（一九二七）の本店増築工事を機に再び日本銀行臨時建築部（注8）の技師長に就いていました。

長野は本店増築工事に深く関わる傍らで、広島、松山の各支店に続き松江支店の設計に携わりました。昭和期に入り、多様な建築様式が表現される中で、長野は頑なに古典様式建築にこだわりました。

長野は、昭和十二年（一九三七）十二月に亡くなりました。本店増築工事、松江支店改築工事の完了の前年でした。本店増築よりも後に設計した松江支店は、まさに長野の遺作であり、日本銀行最後の古典様式建築となりました。

市街地活性化のための保存・活用

旧松江支店の敷地は改築時の隣地購入で多少拡幅したものの、ほぼ敷地いっぱいに本館・付属家等が配置され、余裕がほとんどありませんでした。また昭和二十三年（一九四八）末には支店職員数が改築時の二倍半まで増加し、本館・付属家とも著しく手狭となったため、昭和二十四年（一九四九）から昭和三十年（一九五五）にかけて西北側の隣地を購入し、付属家および荷捌所・車庫等を増築しました。

その後、業務の拡大および、昭和四十七年（一九七二）の京橋川の氾濫により地下金庫に浸水したり、地下金庫の壁に生じた亀裂から地下水がしみ出す事態が生じたため、適地を求めて新築を行うことになりました。（写真４）

母衣町の日赤病院の跡地を購入し、昭和五十六年（一九八一）四月に現在の三代目松江支店に新築移転しました。（写真５）

一方、旧支店建物は島根県の所有となり、昭和六十三年（一九八八）に県庁周辺整備基本構想の中で同建物の取り壊し計画が発表されたものの、それに対する市民有志による保存運動を受けて、同建物は県から松江市に譲渡され取り壊し計画も見直されました。

松江市の策定した中心市街地の活性化事業の中で、旧松江支店建物の有効利用の検討が始まりました。平成十年（一九九八）に「匠」をテーマとした製造・販売一体型の観光商業施設の方針が決定し、翌年の平成十一年（一九九九）から改修工事が行われ、平成十二年（二〇〇〇）四月に「カラコロ工房」としてオープンしました。（写真６・７）

「カラコロ」の由来は、明治時代に木橋であった松江大橋を渡る人々の下駄の「カラコロ」という音に、小泉八雲が深く心ひかれたとのエピソードによるものと言われています。

「カラコロ工房」への改修工事は、優良な保存活用事例としてＢＥＬＣＡ賞（ベストリフォーム部門）（注9）を受賞しました。

今、松江の街は「平成の大遷宮」の出雲大社とともに「神々の国しまね」プロジェクトの中心地として話題を集めています。これからも、旧松江支店建物が、国際観光文化都市松江の歴史的建造物として保存・活用されることを期待します。

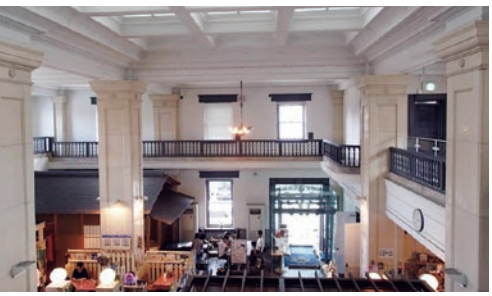

写真６　カラコロ工房の内部

写真７　カラコロ工房の中庭

写真５　現在の松江支店

（注8）日本銀行臨時建築部　日本銀行本店の一号館～三号館増築工事（昭和四年［一九二九］着工、昭和十三年［一九三八］完成）にあたり行内に組織された、長野宇平治技師長以下九〇名の技師・技手を擁した建築部。

（注9）ＢＥＬＣＡ賞（ベストリフォーム部門）　全国の設計・建設会社で構成される公益社団法人「ロングライフビル推進協会」により、改修によって画期的な活性化を図った建築物のうち特に優秀なものを表彰するもの。平成三年（一九九一）から実施。